自民党政権4代の情報発信力
――内閣メールマガジン分析を中心に――

木　下　和　寛

1. はじめに

2009年8月の総選挙により、自民党は連立相手を変えながら守ってきた政権を、ついに失った[1]。解散・総選挙で「国民の信」を問わないまま、党内で総裁＝首相の座をたらい回しにしてきた「つけ」を精算させられた形である。2005年9月、当時の小泉純一郎首相が断行した「郵政総選挙」は自民党の地滑り的大勝だったが、09年8月選挙はそっくり裏返しの形となった[2]。

自民党は、なぜ4年間でこれほどに凋落してしまったのか。様々な要因が絡み合っての結果だが、詰まるところは「国民の不信感を深めてしまった」ことがこの結果を生んだと言える。

05年総選挙以降の「1年交代首相」が響いたのは確実だろう。06年9月に小泉氏が退陣。安倍晋三氏が後を継いだが、1年後に体調不良を理由として辞任。後継の福田康夫氏も翌08年9月、「政策を力強く進めるためには新体制で」[3]と政権を投げ出した。そして、麻生太郎氏は「選挙の顔」として登場したはずなのに解散・総選挙を延ばしに延ばし、挙げくに大敗した。

2001年4月26日に就任した小泉氏の首相在任期間は約5年5カ月（1980日）。第2次大戦後の首相としては佐藤栄作、吉田茂両氏に続く第3位の長期政権であり、朝日新聞の世論調査による平均内閣支持率は50%[4]。自民党の内閣では最高を記録した。朝日新聞によると、小泉氏が首相となった01年4月の支持率78%は戦後の歴代内閣で最高。これが1カ月後には84%にまではね上がる。ハンセン病訴訟で国が敗訴[5]したが控訴を断念。これが「小泉首相、土壇場で『民』選ぶ」[6]などと評価され、支持率を押し上げた。

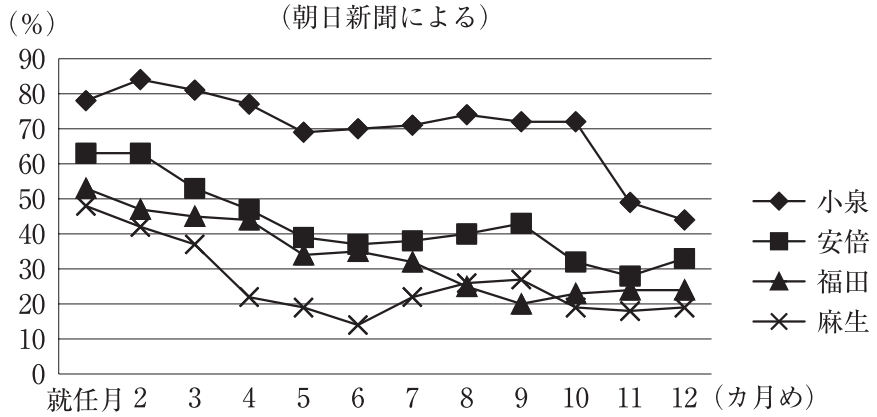
その後も国民の支持は底堅く、内閣存続の安否を分けるとされた「30%」を一度も下回ることがなかった。最低記録は05年1月の33%である。この落ち込みは、郵政民営化、自衛隊のイラク派遣、年金改革などでの強引な手法が国民をしらけさせた結果と見られる。それでも2006年秋の自民党総裁任期切れまで首相を続けてほしい、という声は53%と過半数を占めていた[7]。

だが、その後の首相たちは低支持率にあえぐ。（図1）は、朝日新聞の世論調査による各首相就任後の月別支持率グラフである。安倍氏は就任直後こそ63%の支持を集めたが4カ月目には5割を切り、以降は低迷を続ける。11カ月目の07年7月には28%と最低を記録。同月の参院選挙で大敗して過半数を民主党中心の野党に奪われ、衆院では与党、参院では野党優位という「ねじれ国会」が現出した。

就任月に53%でスタートした福田氏は5カ月目の08年1月に34%。同4月には25%になり、以降は退陣まで20%台のままだった。最低は08年5月の20%。

麻生氏は、さらにひどかった。就任月でも48%と5割を下回り、4カ月目の08年12月に早くも22%と内閣存亡の「危険ライン」を大きく下回り、09年1月には19%、同2月には14%と10%台を続けた。小沢一郎民主党代表（当時）の公設秘書逮捕などで一時は盛り返すがそれでも

（図 1）小泉、安倍、福田、麻生内閣　就任後 1 年の月別支持率推移
（朝日新聞による）



20% 台。09 年 6 月から 8 月までの 3 カ月間はそれぞれ 19%、18%、19% であり、総選挙での大敗につながってゆく。

小泉氏の政権と後継 3 氏の政権で、なぜこれほどの違いが出たのか。安倍政権では年金記録の大量行方不明、閣僚の事務所経費疑惑などが相次ぎ、福田内閣でも閣僚の政治資金問題や不適切発言、前防衛事務次官の収賄容疑での逮捕などがあった。麻生政権でも中川昭一財務・金融相が「もうろう会見」で辞任する不祥事があった[8)]。

こうしたことでは小泉氏も「順風満帆」ではなかった。外交機密費から内閣官房機密費への”上納”問題、外相に任命した田中眞紀子氏と外務省幹部との対立などスキャンダルを抱え、支持率を落としたこともある。とくに国民的人気が高かった田中氏を解任した直後は大きく下げた。が、いつも持ち直しで高い平均支持率につないでゆく。

小泉氏後継の 3 首相が全くの無為無策だったわけではない。麻生氏は、とにもかくにも米国に端を発した金融危機に伴う景気の後退に歯止めをかけた。福田氏は自ら「かわいそうなくらい苦労している[9)]」と国会で発言し失笑を買ったが、苦労していたのは事実だろう。安倍氏も体調を崩すほど懸命だった。しかし、その努力や訴えは国民の胸に届かず、支持率は低迷することになった。

指導者の人気＝支持率に大きく影響するのがメッセージ発信力であることは論を待たない。小泉氏と後継 3 首相とのメッセージ発信力に違いがあったのか。あったとすれば、どのようなものだったのか。小泉政権が発行を始め、後継の各政権にも引き継がれた内閣メールマガジン（以下内閣メルマガ）の言説分析を中心に、歴代政権のメッセージ発信力を検証した。

2. メールマガジン「巻頭言」

内閣メールマガジンは、小泉政権の発足から間もない 01 年 6 月に創刊された。ブロードバンド回線の普及が進み[10)]、インターネット利用者が急速に増え始めた時期。政府が最新の媒体で情報提供するという目新しさもあって読者は爆発的に増え、02 年 1 月日 17 日発行の第 30 号では配信数

約227万を記録した。後継内閣もメルマガ発行を踏襲し、安倍内閣時の07年3月で159万だった。福田内閣ではほぼ150万前後、麻生内閣でも同レベルを保った[11)]。

内閣メルマガは週1回木曜発行。いわば「週刊誌」だ。日本雑誌協会発行の『マガジンデータ2007』によると、週刊誌で最大の発行部数は週刊文春の約78万。紙と電子データ、有料と無料の違いはあるが、内閣メルマガの「大部数」が際だっていた。

各内閣は、新しいコンテンツの導入も積極的に行ってきた。登録読者にメールで配信するだけでなくWebページでも掲載。写真や動画を入れ、インターネットテレビへのリンクを張るなど、よりビジュアルに、より多彩にして魅力化を図ってきた。

しかし、小泉内閣時代から続いた最大の特色は、首相が自分の名で掲載する「巻頭言」である。小泉内閣では「らいおんはーと～小泉総理のメッセージ」。安倍内閣では「こんにちは、安倍晋三です」。福田内閣では、「あっという間の1週間でした。福田康夫です」（07年10月11日配信の創刊号）のように、書き出しの言葉をそのままタイトルにした。麻生内閣は「麻生太郎の『強く明るく』」。

Webページやメールを使っての政府広報には他の主要国も力を入れている。米国ではホワイトハウスのホームページ『ザ・ホワイトハウス』[12)]、英国では首相官邸の住所ダウニング街10番地からとった『ナンバー10』[13)]がある。『ザ・ホワイトハウス』には「EMAIL ALLERTS」というメールサービスがあるが、コンテンツ更新を知らせるものでバラク・オバマ大統領名でのコラムはない。『ナンバー10』には、「首相から」と、「ナンバー10・ニュースレター」の二つのメールサービスがあるが、これもゴードン・ブラウン首相の演説やスピーチを掲載したWebページにリンクさせる形だ。

超多忙の首相である。内閣メルマガの「巻頭言」は、全部が本人の執筆ではないかもしれない。ただ、秘書などが代理で書いたとしても、仕える首相の個性を出来るだけ出すように努めるだろうし、首相が掲載前にチェックすることもあるだろう。署名を入れる以上、首相の意に沿わない言葉やデータを入れることは少ないと見ていい。「巻頭言」は、首相の「肉声」そのものではないにせよ、それにかなり近いものと見て差し支えないだろう。

当然ながら、メッセージの発信力は文章による言説だけに負うものではない。風貌、声音、表情、しぐさ、語り口等々の視覚的・聴覚的イメージもまた大きく影響する。とくに政治家は、それらを総合してメッセージを発信する。テレビが政治家にとって、もっとも強力な発信装置である所以だ。

しかし、容貌や物腰、発音がどれだけ優れていても、言葉とそれをつむいだ「物語」の創造力は必須である。では、内閣メールマガジン巻頭言に見る歴代各首相の「言葉と言葉のつむぎ方」はどうだったか。以下がその分析である。

3.「言葉の数」比較

（表1）は小泉内閣メルマガの巻頭言「らいおんはーと」と安倍内閣メルマガの同「こんにちは、安倍晋三です」、（表2）は福田内閣メルマガ巻頭言（統一タイトルなし）と麻生内閣メルマガの同「麻生太郎の『強く明るく』」の各回タイトルと1本あたりの文字数を比較している。小泉内閣は5年5カ月続いたが、後継内閣はいずれも1年だったことから、小泉内閣についても発足後1年分について調べた。

4人の中では、安倍氏巻頭言の長さが際だつ。とくに就任後半年では、小泉氏に比べて2倍から3倍の文字数だった。小泉氏も政権末期になると文字数が増え、退任直前の第246号（90年8月10日－24日号）では1,857文字、第247号で1,653文字などと長文を書いている。だが、政権発足後の1年は、きびきびとした短文に終始した。

表1	小泉内閣メルマガ（2001年6月～2002年5月）		安倍内閣メルマガ（2006年10月～2007年9月）	
号	タイトル	字数	タイトル	字数
0	メールマガジンの創刊にあたって	613	「美しい国創り内閣」の発足	1,412
1	24時間公人	550	北朝鮮に対する厳格な措置決定	1,439
2	感動のスポーツ	473	拉致被害者全員の生還に向けて	1,099
3	「変人」とは	506	教育再生	1,117
4	リーダーは孤独	426	海を守る自衛隊	1,071
5	小泉流ストレス解消法？	366	日米野球の始球式	924
6	音楽は詳しいよ！	437	教育基本法への想い	1,284
7	歴史小説は面白い	314	ハノイを訪ねて	1,211
8	なくて七癖	343	予算編成に向けて	953
9	夏休みの思い出	782	子供たちの目の輝き	1,090
10	いたって元気。夏バテ防止法	434	40年ぶりの給食	1,265
11	歌を詠む	465	国会終了と国連加盟50年	1,217
12	官邸の居心地	454	ヨーロッパから初メール	651
13	巻頭言なし（米国9・11事件で声明）	-	首脳外交の醍醐味	907
14	難局にひるまず立ち向かおう！！	585	7提言と4緊急対応策を受けて	1,178
15	ファイト　テロリズム	442	出来難き事を好んで之を勤るの心	1,114
16	真昼の決闘	712	北の街を訪ねて	1,576
17	論語「忠恕」の意味	444	中高生との交流	1,338
18	「思無邪（思い邪無し）」	422	「SONG FOR MEGUMI」	1,127
19	APEC首脳会合	446	越後に息づく「結い」の精神	1,287
20	文化交流	374	予算案が衆議院通過	1,249
21	食欲の秋	347	更生する少年たちの心	1,363
22	教育について	782	勇とは義しき事をなすことなり	993
23	尊敬する人物	641	予算成立に思う、がんばれ地方	1,372
24	「型」を大切に	600	満開の桜を背に	982
25	政治を身近に！	798	友好関係を超えて	1,211
26	改革によせる決意と情熱	689	被災地輪島を訪ねて	1,136
27	自信を持とう	686	2008洞爺湖サミットの決定	1,251
28	一年を振り返って	680	アメリカと中東5カ国を訪ねて	1,587
29	新年を迎えて	703	国民投票法の成立	1,346
30	アセアン諸国訪問	965	教育は人なり	1,499
31	今年は日韓国民交流年	739	信頼ある年金を	1,705
32	国会審議に臨む	632	G8ハイリゲンダム・サミットに臨む	1,753
33	改革への決意は全く揺るがない	687	ハイリゲンダム・サミットを終えて	1,395
34	若者に期待	522	いざ公務員改革	1,228
35	日米首脳会談とパラリンピック	1094	平成19年沖縄全戦没者追悼式など	900
36	少子高齢社会	756	162日間を乗り越えて	1,138
37	司法制度改革	646	プロの意識	1,021
38	無信不立	579	責任の重さ	1,319
39	春風接人（しゅんぷうせつじん）	666	原点からの改革	1,421
40	卒業の季節に	807	覚悟を決めて	1,045
41	和して同ぜず	631	広島、長崎への思い	779
42	指導者の自覚	696	官邸の暑い夏	797
43	有事法制	736	アジア外交を進める	1,368
44	総理就任一周年を迎えて	754	政策実行内閣	1,250
45	アジア・大洋州諸国訪問と新官邸	684	仕事の秋	830
46	沖縄復帰30周年	815	改革、テロとの闘いを前に進めるために	932

表2	福田内閣メルマガ（2007年10月～2008年9月）		麻生内閣メルマガ（2008年10月～2009年9月）	
号	タイトル	字数	タイトル	字数
0	はじめまして、福田康夫です	421	総理の使命	627
1	あっという間の1週間でした	715	日本の底力	733
2	1週間ぶりのご無沙汰です	975	政策に集中	1,242
3	試練の連続	1,187	まずは現場から	815
4	とうとう11月1日	1,103	百年に一度	726
5	ひたすら国民のためを思い	798	「生活対策」	1,008
6	安全・安心を第一に	819	現場の肌感覚	917
7	外交の1週間	1,169	日本のリーダーシップ	1,120
8	寒さが厳しくなってきました	937	輪と和	1,200
9	水がつなぐ命	946	誇り	1,210
10	生活を守る	921	守るべきは	745
11	一つひとつ着実に	1,105	生活防衛のための緊急対策	1,136
12	今年最後のご挨拶	981	生活防衛のための、大胆な実行予算	1,514
13	今年もよろしくお願いします	985	「安心、活力」	682
14	現場を見て	1,353	新成人の皆様へ	1,340
15	春に向かって	759	使命と責任	1,036
16	丁寧に、ねばり強く、話し合う	986	春に花を	883
17	食の安全について	869	官僚の「天下り」と「渡り」のあっせんを廃止	774
18	現場に足を運んで	1,026	国づくりの基本は人づくり	1,129
19	捜索に全力	936	介助犬との出会い	1,139
20	二者択一を超えて	1,226	平和と繁栄の礎	1,502
21	果実を分かち合う	1,250	ある少女からの手紙	1,509
22	「きぼう」の第一歩	922	皆さんからの質問	1,730
23	日銀総裁問題	1,153	人命と財産を守る	1,105
24	道路財源問題	1,150	夢を応援したい	1,168
25	政治の責任	1,297	安心と活力のための政策総動員	1,727
26	ねじれ国会	1,138	北朝鮮、ルール破りに断固たる対応	1,000
27	安心して産める社会	1,258	国際社会が一致団結	1,081
28	消費者が主役	1,394	低炭素革命で、石油をリードする国へ	1,403
29	生活者財源	1,679	国民に安全と安心を	1,016
30	胡主席を迎えて	1,101	農林水産業は成長産業	1,201
31	困っているときこそ	901	感染の拡大を防ぐ	1,121
32	だから消費者庁	719	国際社会への重大な挑戦	811
33	元気なアフリカ	1,029	景気回復への足取りを確かなものに	1,223
34	世界が行動すべきとき	1,183	未来を救った世代	1,320
35	あきらめないこと	1,024	被害者の思いが生んだ消費者庁	979
36	生活者の立場に立って	1,200	安心・活力・責任	1,318
37	安心して暮らせる社会	1,723	国家・国民の安全と繁栄を目指して	1,213
38	七夕を前にして	1,125	ラクイラ・サミットにて	1,205
39	違いを乗り越えて	1,397	決断のとき	1,348
40	幸せを実感できるように	809	衆議院解散－景気回復と安心社会の実現	1,554
41	着実に実行	956	そなえよつねに	1,212
42	困難を乗り越えるために	1,388	日本の将来を真剣に考えよう	1,404
43	声なき声を聞く	1,205	国を守り、平和を守る	1,250
44	平和への願い	1,252	政治は続く	818
45	一枚のうろこ	926		
46	ありがとうございました	878		

1,000 文字を超えたのは、第 35 号（02 年 2 月 21 日号）の「日米首脳会談とパラリンピック」。ブッシュ米大統領を迎えての会談やその感想を語り、さらにソルトレーク・パラリンピックの結団式にも触れながら、総文字数は 1,094 文字だった。

各内閣メルマガの創刊準備号（ゼロ号）で比較してみると、小泉氏の「メールマガジン創刊にあたって」（01 年 5 月 29 日）の 613 文字に対し、安倍氏の「『美しい国創り内閣』の発足」は 1,412 文字で 2 倍以上だ。麻生氏の「総理の使命」は 627 文字で、ほぼ小泉氏と同じ。もっとも短いのは福田氏。「はじめまして、福田康夫です」は 421 文字。小泉氏、麻生氏の約 3 分の 2、安倍氏の 3 分の 1 である。

では、内容や言葉はどうか。ゼロ号の巻頭言を冒頭から 420 字前後（福田氏の全文相当）を引用する。

【小泉氏】

小泉純一郎です。私のことを「変人」とかライオンのような髪型ぐらいしか知らない方も多いのではないでしょうか。この「小泉内閣メールマガジン」で、小泉内閣の素顔を知って頂きたいと思います。

私の内閣は「改革断行内閣」です。この改革の成功には、皆さんとの対話が不可欠です。メルマガで、私の、そして小泉内閣の考えをお伝えし、また皆さんのご意見もうかがい、この国をどのような国にしていくのか、世界や子どもたちに誇れる国にするにはどうしたらよいのか、住みやすく、働きやすく、憩いのある国に向けて何をするべきなのか、是非、皆さんと一緒に考え、実現に向けて努力していきたい。見直すべきものは見直し、守るべきものは守り、よい国を創っていきたい。それが小泉内閣の目指すものです。

私は、改革の過程を皆さんに明らかにし、広く理解と問題意識を共有していきたい、「信頼の政治」を実現していきたいと考えています。

【安倍氏】

こんにちは、安倍晋三です。平成 18 年 9 月 26 日、第 90 代内閣総理大臣に就任いたしました安倍晋三です。戦後生まれ初の総理として、重責を与えられたことに身のひきしまる思いです。国民のみなさまの期待をしっかりと受けとめ、身命を賭して職務に取り組んでまいります。

私は、毎日額に汗して働き、家族を愛し、未来を信じ、地域をよくしたいと願っているすべての国民のための政治をしっかりと行っていきたい。そのために「美しい国創り内閣」を組織いたしました。

かつて、日本を訪れたアインシュタインは、「日本人が本来もっていた、個人に必要な謙虚さと質素さ、日本人の純粋で静かな心、それらのすべてを純粋に保って、忘れずにいてほしい」という言葉を残しました。

日本は、世界に誇りうる美しい自然に恵まれた長い歴史、文化、伝統を持つ国です。アインシュタインが賞賛した日本人の美徳を保ちながら魅力あふれる活力に満ちた国にすることは十分可能です。日本人にはその力がある、私はそう信じています。

【福田氏】

「政治家も役人も信用できない。」

そうした国民の皆さんの不信の声を、私は、今、率直に受け止めています。

国民の皆さんの信頼なくしては、どのような立派な政策も実現できません。

皆さんから信頼されるように、よい政策を実現するよう、一生懸命やっていく覚悟です。

「信頼」を取り戻す名案はありません。

国民の皆さんの気持ちになって、必要な政策を一つひとつ丁寧に積み重ね、さらに、その政策を皆さんに理解していただくことが、大事であると思います。そのためには、お寄せいただく

ご意見が大変重要であり、皆さんとの対話を重ねていきたいと考えております。
そうした思いから、小泉元総理、安倍前総理と続けたメールマガジンは、福田内閣においても引き継ぎます。
メールマガジンは、皆さん一人ひとりとのホットラインです。色々なご意見やできごとなどを、是非ともお聞かせください。皆さんとの双方向の対話の場として育てていきたいと願っております。

【麻生氏】
麻生太郎です。平成20年9月24日、第92代内閣総理大臣に就任しました。メルマガ読者の皆さん、よろしくお願いいたします。
総理としての重責をになうこととなり、その責任の重さを改めて感じています。特に、景気への不安、国民の生活と将来への不安、そしてそれらに対して手を打てない政治への不満の危機にあることを厳しく受け止めています。
日本の元気を取り戻す、強くて明るい日本をつくることこそが、私の使命であると思っています。
緊急な上にも緊急の課題は、日本経済を立て直し、生活を少しでも豊かにすることです。すぐさま景気対策、物価高対策に着手します。日本経済は全治3年。3年で日本は脱皮せねばなりません。
私は、日本の底力を信じています。
勤勉な国民であり、優れた技術をもっています。日本経済は、幾度となく厳しい試練に果敢に応じ、その都度、強くなってきました。悲観しなければならない理由など一つもありません。
私は、逃げない政治、責任をもって実行する政治の実現に一身を賭します。

4. 情緒的な表現とクールさと

安倍氏の場合、自分で言うように戦後生まれ初の首相としての意気込みもあったのだろうが、情緒的な表現が目立つ。「身命を賭して」「額に汗して」「美しい」などなど。理念先行と言われた安倍氏のパーソナリティーを典型的に表した文章と言える。

こんな特徴は、離任の弁でも現れている。安倍氏も福田氏も最終号は第46号だが、安倍氏のタイトルは「改革、テロとの闘いを前に進めるために」と、デモのシュプレヒコールを聴くような高調子。一方、福田氏は「ありがとうございました」と、ごくあっさりしている。内容でも、安倍氏は「無責任と言われるかもしれません。しかし、国家のため、国民のみなさんのためには、私は、今、身を引くことが最善だと判断しました」と悲壮感さえ漂わせる。

福田氏も「国民の皆さんのため」とは言っている。が、辞任決意の理由は「政策をより力強く進めていくためには、新しい体制を整えるべきであると考えた」。クールとメディアなどで評された発言、物腰そのままの文章と言える。

麻生氏の離任の弁「政治は続く」も、福田氏と同様、情緒的な表現は少ない。総選挙での敗北については、「政府与党への、ご不満、ご批判を真摯に受けとめています」と自省してみせるが、その一方で「正しい政策を進めてきた」と自負し、「政局よりも政策を優先した判断は、国民生活のことを考えれば、決して間違ってはいなかった、と考えています」と胸を張っている。

一方、力をたっぷり残して去った形の小泉氏は余裕たっぷりだ。最終号（第250号）では、「民間や地域の方々が『痛みに耐えて』改革に取り組んだおかげで、日本経済も回復軌道にのり、人々は自信を取り戻しはじめたと思います」と成果を誇り、短歌と称する「ありがとう　支えてくれてありがとう　激励協力　只々感謝」で結んでいる。

次に、ほぼ同じ文字数の文章で句点（。）の数を調べた。句点が多いほど一文は短く、平易簡明でリズムの良い文章になることが多い。小泉氏は「日米首脳会談とパラリンピック」（1,094文字）、

（表 3） 巻頭言、年間の総文字数と句点数

	小泉	安倍	福田	麻生
総文字数	27,923	56,130	50,274	51194
区 点 数	880	1,371	1,026	1,288
句点あたり文字数	32	41	49	40

安倍氏は第 3 号「教育再生」（1,117 文字）、福田氏では第 30 号の「胡主席を迎えて」（1,101 文字）、麻生氏は第 23 号「人命と財産を守る」（1,105 文字）で調べてみた。

結果は、小泉氏と安倍氏が 28 文字、福田氏 22 個、麻生氏は 26 個。句点一つあたりの文字数は、小泉氏 39 文字、安倍氏 40 文字、福田氏 50 文字、麻生氏 42 文字で、一文がもっとも長いのは福田氏だった。これを 1 年間の総文字数で調べたのが（表 3）である。ほぼ同じパターンであり、福田氏の一文の長さと小泉氏の短さが際立っている。

（表 4）は、小泉、安倍、福田氏の巻頭言の中から、よく使われていた 30 の言葉を抜き出し、その出現数を比較したものだ。安倍、福田、麻生氏は在任期間中の通算。就任して約 1 年で去った他の首相と同列で比較するため、小泉氏についても最初の 1 年間について調べた。

各氏の政治姿勢や優先目標の違いが浮かび上がる。小泉氏がもっとも多く使った言葉は「改革」（130 回）だが、その路線を引き継いだはずの安倍氏では 5 位（96 回）に下がり、福田氏にいたっては 7 位とトップ 10 には入っているものの、出現数は 27 回と小泉氏の 5 分の 1 だ。

麻生氏はさらに少なくなって 21 回。麻生内閣のメルマガ全 44 回を半分ずつに分けると、前半では 12 回、後半は 9 回。「小泉路線」から徐々に離れる様子がうかがえる。

安倍氏がよく使った言葉のトップは「日本」で 219 回。麻生氏も「日本」は大好きのようでトップで 175 回だった。首相であれば、この言葉が頻出するのはいわば当然とも言え、小泉氏も 2 位、福田氏で 3 位。ただ、出現数は安倍、麻生氏に比べてぐっと少なくなり、小泉氏では 88 回、福田氏にいたっては 58 回と安倍氏の 4 分の 1 になる。

「国民」も、4 氏そろってよく使っている。福田氏はトップで、同氏が唯一、100 回以上使った言葉だ。小泉、安倍、麻生氏は 3 位。

各氏が重要視していた国や地域も見えてくる。小泉氏は「米国（もしくは「アメリカ」）」の出現数が 6 位と国、地域のトップ。米大統領ジョージ・ブッシュ・ジュニアと親友の関係を結び、2003 年のイラク戦争でも終始米国を支持し続けた小泉氏らしい。「米国」は麻生氏では 8 位。安倍氏では 14 位となり、福田氏になると 20 位になってしまう。ちなみに安倍氏の国・地域トップは「アジア」（11 位）。福田氏は「アフリカ」（9 位）。麻生氏は「北朝鮮」（6 位）である。

政策論は読者に届かず

言葉の選択や巻頭言の内容を見ると、小泉氏以降の各首相はいずれも、政策や自分の考え方を打ち出し、丁寧に説明し、理解を訴えている。たとえば給油問題。「ねじれ国会」のあおりで 07 年 11 月 1 日、テロ特措法が期限切れとなり、インド洋で行われていた海上自衛隊補給艦による多国籍軍艦艇への給油活動が中断されることになった。福田内閣メルマガ第 4 号は、ちょうどこの日の発行で、巻頭言のタイトルは「とうとう 11 月 1 日」。

この中で福田氏は、「最後の給油」を終えて去る海自補給艦にパキスタン艦が感謝の横断幕を掲げたことを紹介し、「甲板の上で目玉焼きが作れるほどの炎暑の中で自衛官諸君がこれまで行ってきた地道な活動が、いかに国際的な評価と結びついていたかを、改めて実感しました」と活動の重要性を強調。「この前の参院選で自民党が惨敗し、衆議院の第一党が自民党、参議院の第一党が民主党という、ねじれた国会状況」がこの事態を招いたことを率直に認め、小沢一郎民主党代表に「胸

（表4）　4代の首相「巻頭言」頻出用語トップ30比較

	小泉		安倍		福田		麻生	
順	言葉	出現	言葉	出現	言葉	出現	言葉	出現
1	改革	130	日本	219	国民	114	日本	175
2	日本	88	教育	123	世界	73	経済	96
3	国民	37	国民	121	日本	58	国民	90
4	世界	28	世界	97	行政	58	世界	75
5	テロ	26	改革	96	国会	38	景気	52
6	米国	25	国会	65	経済	37	北朝鮮	49
7	経済	25	子ども	55	改革	27	安全	31
8	子ども	17	憲法	51	安全	26	米国	29
9	韓国	16	経済	45	アフリカ	26	国会	28
10	文化	16	年金	44	中国	23	安保理	21
11	中国	14	アジア	35	アジア	20	改革	21
12	国会	12	安全	35	年金	20	情報	19
13	日韓	12	中国	33	子ども	19	教育	18
14	教育	11	米国	32	自衛隊	18	アジア	17
15	アジア	8	テロ	31	防衛	15	外交	17
16	外交	8	北朝鮮	30	テロ	15	地方	17
17	安全	7	環境	25	自民党	15	環境	16
18	映画	7	拉致	24	環境	15	国連	16
19	行政	7	外交	20	情報	14	子ども	16
20	環境	6	文化	18	米国	13	自衛隊	14
21	スポーツ	5	地方	16	日中	13	テロ	11
22	音楽	5	国連	15	地方	12	日米	11
23	情報	5	いじめ	13	インド洋	9	韓国	11
24	景気	4	日米	13	農業	8	拉致	10
25	財政	4	自衛隊	12	少子化	8	行政	9
26	地方	4	石油	10	景気	7	財政	8
27	日米	4	行政	10	教育	6	日韓	8
28	欧州	3	防衛	9	外交	6	年金	7
29	日中	3	発信	9	生命	5	中国	7
30	石油	2	生命	9	日米	5	防衛	7

＊「欧州」は「ヨーロッパ」を、「米国」は「アメリカ」を含む。

襟を開いた話会い」を求めていることを明らかにしている。

続く第5号（07年11月8日）では、小沢一郎民主党代表（当時）との党首会談について説明し、「党首会談について、『連立政権』の話だけがとりあげられていますが、テロ法や国民生活に関係する政策のことも話し合いました」などと詳しく説明している。日銀総裁人事が民主党の反対で流れた後の第26号（08年3月20日）では、「今日は、戦後初めて、日本銀行総裁のいない日となりました」「大変ふさわしい人物でしたが、民主党のご理解が得られませんでした」と、さすがに民主党への"恨み節"とも聞こえる言葉もあるが、全体としては冷静。任命にこぎつけられなかった自らの責任を「重く受け止めています」と認めている。

麻生氏も率直かつ丁寧に政策やその手順を説明している。

08年12月25日－09年1月1日合併号の『生活防衛のための、大胆な実行予算』では第2次補正予算をまとめたことを報告し、「異常な経済には、異例な対応が必要です。大胆な対策を打つことで、世界で最初に、この不況から脱出することを目指します」と明確な目標を設置している。切実な問題として対策を迫られていた雇用問題では「この年末、何よりも切実なのは、住むところを失うこと。雇用促進住宅の空き部屋の活用は、すでに1000戸の入居が決定しています。また、派遣労働者や、内定を取り消された学生、年長フリーターを正規に雇用する企業に対して、50万円から100万円助成します。また、4000億円規模の基金をつくり、高齢者の介護補助、配食サービスなど、未来に向けた新たな雇用を生み出します」と、数字を挙げて具体的に説明している。

安倍氏も、文章に情緒的な部分が多く、都合の悪いことには口をつぐむところが見られたが、丁寧な説明や訴えという点では同じだった。だが、小泉氏に続いた3首相の訴えや説明は、必ずしも読者の理解を得られなかったようだ。

とりわけひどかったのは福田氏である。

（表5）　福田内閣メルマガ文字数トップ10と評価

号	タイトル	字数	評価
37	安心して暮らせる社会	1,723	35.7
29	生活者財源	1,679	21.7
39	違いを乗り越えて	1,397	43.0
28	消費者が主役	1,394	35.4
42	困難を乗り越えるために	1,388	31.6
14	現場を見て	1,353	59.0
25	政治の責任	1,297	36.5
27	安心して産める社会	1,258	37.7
44	平和への願い	1,252	40.1
21	果実を分かち合う	1,250	46.1
20	二者択一を超えて	1,226	42.1

＊評価は読者の感想のうち、「満足」と「やや満足」の合計（単位%）

内閣広報室は、読者から寄せられた声を「メルマガおんらいん読者感想」としてまとめており、（表5）は、福田内閣メルマガの巻頭言文字数トップ10と、それに対する評価である。このうち、「満足」と「やや満足」を合わせた肯定的な評価が50%を超えたのは、第14号（08年1月17日）「現場を見て。人と話して」の一件だけ。年金記録の確認作業を世田谷区の社会保険事務所で視察したことを中心とした文章だ。しかし、ほかは軒並み5割を下回り、文字数第2位の第29号（08年5月1日）「生活者財源」にいたっては、肯定的評価はわずか21.7%と、全体を通じて最低となっている。言葉を尽くした主張、訴えが読者にそっぽを向かれている。安倍氏についても、力こぶを入れた言葉が空回りしている様子が目につく。

対照的に小泉氏は、結論や結果、方針をずばりと示し、こまかな説明はしないことが多い。「私

も、今回の会談を通じて、ブッシュ大統領から自信と勇気をいただいた」（第35号）など、感覚的な表現も目立つ。音楽や映画、スポーツなどの話題が多いのも感覚的だと言えるだろう。それでも人気は終始高かった。

一方、麻生氏は福田氏に比べて"健闘"していた。文字数トップ10のうち8本までが、「満足」と「やや満足」を合わせて6割以上の好評価を受けていた。このうちで最高だったのは文字数第3位（1,554文字）の第40号「衆議院解散－景気回復と安心社会の実現」（09年7月23日）。解散を決意したことを伝え、「私の不用意な発言のために、国民の皆さんに不信を与え、政治に対する信頼を損なわせました。深く反省いたしております」と率直に詫びていた。68.2%の好評価は全号を通じても第2位。だが、支持はメルマガ読者のみ。前掲のように、朝日新聞世論調査による7月の内閣支持率は18%と下から2番目の低さだった。

小泉氏と後継の安倍、福田、麻生の3首相では何が違っていたのか。

「大衆の視野」

まず、人気＝支持率の重要な要件であるパーソナリティーの違い。メルマガ巻頭言の分析を通じて浮かび上がってきたパーソナリティーのイメージは、「クールな福田氏」、「情緒的な安倍氏」、「感覚的な小泉氏」である。麻生氏は、秋葉原界隈で「ちょいワルおやじ」と人気を博したが、巻頭言の文章は、「率直でまじめ」である。

読者・視聴者が分かりやすい表現・言葉を好むことは言うまでもない。そして一般的には、一文が長くなれば分かりにくくなることが多い。また冷静で理詰めだと面白くないと敬遠されがちだ。感情過多でイデオロギッシュな表現は、冷静な人々には鼻につく。福田氏、安倍氏には、こういったところが目についた。一方、小泉氏の言葉は「ワンフレーズ・ポリティクス」と評され、分かりやすかった。メルマガでも、とくに初期には、興味を引き、かつ理解しやすくする努力をしていたようだ。

メルマガの場合、文章の長短はわかりやすさだけの問題ではなく、読みやすさも左右する。わざわざ印刷はせず、ディスプレイの画面で読む人が大多数だろう。パソコンの大画面モニターでさえ紙と比べると読みにくい。まして昨今は、携帯電話、携帯プレーヤーの小さな画面で読む人も増えている。小泉氏のように全体の分量を抑え、さらに文節を短く歯切れ良く、平易なことばで書くやり方のほうが、読者をひきつけたことは間違いないだろう。

大衆人気を背に首相の座を射止めた小泉氏は、国民全体に向けてのメッセージ発信をきわめて重要視していた。1日1回だった「ぶら下がり」取材[14]を2回にしてテレビ向けと新聞向けに分けた。週刊誌やスポーツ紙の編集者・記者との懇談や会見の場を設けた。フランクリン・ルーズベルトの「炉辺談話[15]」ばりに、ラジオのマイクにも向かった[16]。そうした情報発信の中核がメルマガだった。小泉氏の秘書官を務め、「懐刀」と言われた飯島勲氏は著書の中で、「公式のメディア戦略としては、小泉内閣メールマガジンがあった[17]」と述べ、メルマガを戦略の重要な柱としていたことを示している。

アドルフ・ヒトラーは、『わが闘争』の中で、「宣伝は永久にただ大衆にのみ向けるべきである」とし、「宣伝の意義は、まず大衆の視野にまでずらされねばならない[18]」と説いた。彼は大衆を動かすメッセージ発信戦略の神髄をつかんでいた。小泉氏と飯島氏は、ヒトラーの言葉を意識したかどうかはともかく、カン所をとらえていたのは間違いない。安倍、福田氏は小泉氏のメディア戦略を引き継ぎながらも、「大衆の視野」をわがものにしきれなかった面があると言えそうだ。

発信への姿勢

またさらに言えば、福田、安倍両氏は、小泉氏

ほど情報発信に本腰を入れた取り組みをしていなかったように見える。

安倍氏は小泉内閣の官房副長官として、メールマガジンの初代編集長を務めた。自らのメルマガでもそれに触れ、「どんなメッセージを届けるか、内閣の政策を理解してもらうには、どんな誌面構成がよいかと毎週頭をひねり、自らの考えも編集後記の中で随分言わせていただきました」と述べ、「メールマガジンはみなさんと安倍内閣を直接つなぐ大切なホットライン。これを上手に使って、開かれた内閣と安倍晋三個人の人間性をたっぷり紹介していきたいと思います」（ゼロ号巻頭言）と決意表明をしていた。メルマガ編集長に、NTT 広報部で報道担当課長を務めた経験を持つ世耕弘成・広報担当首相補佐官（参院議員）をあてたことも、安倍氏の意欲を示していた。

だが、IT 広報以外では腰を引くところが目立った。「ぶらさがり」を原則 1 日 1 回に減らし、メディア側と対立したのはその一例だ。質問や反論がない、一方通行の伝達を好んだのである。メルマガ巻頭言の自分の理念と美意識に酔うような文章は、厳しく言えば読者・国民に理解してもらうことよりも、自己満足を先に立てたとさえ読める。

また、辞任表明に先立つ内閣改造では世耕氏を広報担当首相補佐官とメルマガ編集長からおろした。広報担当補佐官の後任は置かず、メルマガ編集長は官房副長官の大野松茂衆院議員とした。大野氏はそのとき 71 歳。世耕氏の編集長就任時 43 歳、安倍氏の同 46 歳と比べると際だって高齢だった。年齢を重ねても IT とそれを駆使した広報に理解と知識を持つ人はいるだろう。だが大野氏に広報の経験はなく、IT に強いという評価もとくになかった。

松岡利勝農水相の自殺で急きょ後任に任命した赤城徳彦衆院議員にも事務所経費疑惑などの問題が続出し、与党内でも「お友達内閣[19]」批判が強まっていた。続く参院選惨敗で自信を失い、「お友達」の 1 人、世耕氏を外したと見られるが、政権以前に広報・メルマガを投げ出した感さえある。

福田氏は、安倍氏よりさらにメッセージ発信について淡泊だったと言わざるを得ない。福田内閣メルマガの編集長には、官房副長官に留任した大野松茂氏を引き続きあてた。広報を大事に考えるのなら、大野官房副長官は留任させるとしても、別に気鋭の人材をメルマガはじめ広報の担当者にあてるのではないか。

福田氏は、記者団への対応を「必要悪」と考えていたようにさえ見える。辞任表明後は「ぶらさがり」拒否の姿勢を示した。辞任表明の記者会見では、「総理の会見が国民にはひとごとのように聞こえる」という記者に「ひとごとのように、とあなたはおっしゃるけどね、私は自分を客観的に見ることができるんです。あなたとは違うんです[20]」と気色ばんだ。日頃の思いが噴き出した感がある。

発信よりも、むしろ情報の抑制・統制を好んだようでもある。官房長官時代は秘密主義で知られた。03 年のイラク戦争の後、防衛庁（現在は防衛省）は、定例記者会見のうち、陸上・海上・航空各幕僚長の記者会見をやめたいと記者クラブに申し入れた。当時、影の防衛庁長官とささやかれていた[21]福田官房長官の強い意向だといわれた。記者クラブ側は反対して防衛庁側と対立していたが、年金未納問題で福田氏が官房長官をしりぞくと会見廃止問題も立ち消えになった。福田首相のもと、また各幕僚長の定例記者会見廃止の話が持ち上がった[22]が、前回同様に福田氏の辞任で消えた。

発言のぶれでつまずいた麻生氏

このように各首相のパーソナリティーと、情報発信に対する熱意と覚悟の違いが人気を分け、支持率にもつながったと見ることができよう。では、麻生氏はどうだったか。

麻生氏は、どちらかと言えば小泉氏型だった。06 年の自民党総裁選の際、東京・秋葉原で「お

たくの皆さん」と呼びかけ、一躍人気を集めたが、情報発信、とりわけITを駆使しての発信を重要視していたのは明白だ。

編集長・官房副長官には麻生氏の側近中の側近と言われる松本純・衆院議員をあてた。就任時で58歳。ブログを持つのはもちろん、世界的な巨大動画投稿サイト、「YouTube」のディレクター[23]ユーザーで、麻生氏や自身の活動記録を中心に多くの動画を投稿しているIT通だった。

松本氏はメルマガ編集長になると早速、首相へのインタビューを動画で視聴できる「太郎ちゃんねる」を始めた。従来あった官邸ホームページのインターネットテレビとは別の新しいコンテンツで、Webページにはリンクを張っておらず、登録しているメルマガ読者だけが視聴できるシステム。毎回、まず「今週のお題」として質問の内容を紹介し、麻生氏がカメラに向かって答える形をとった。創刊号では「総理になって、これだけはやりたいということは？」。第3号では「漫画から時代背景がわかるとのことですが、具体的にはどのような作品がありますか？」等々、麻生氏のキャラクターと政策、理念を親しみやすい雰囲気で紹介しようとしていた。

発信への意欲は安倍、福田両氏を上回り、小泉氏に近かったと言える。大派閥に属さず党内基盤の弱かった麻生氏としては、国民的な人気＝支持率を足場にせざるを得ないという事情があった。このあたりは森（喜朗）派という大派閥に属しながらも”我が道”を行き、取り巻きも少なかった小泉氏と似ている。ともに町村派[24]という大派閥の力を背景にした安倍、福田両氏と対照的だった。

バーナード・ベレルソンは、メディアはパーソナルであればあるほど意見を変更させる効果が大きくなると指摘し、コミュニケーション活動に含まれている「パーソナルな性質」の量が大きければ大きいほど、その活動は効果的になるともしている[25]。首相個人から読者個人に送り、呼びかける形のメルマガは、その意味で大きな効果が期待できると言える。

メルマガによる麻生氏の発信が、ある程度の成功を収めたのは確かだ。前述のように、読者の評価が高かったことはその証左と言える。

だが、麻生氏は自らの言動でつまずいた。相次いだ失言。「未曾有（みぞう）」を「みぞうゆう」と読むなどの漢字の読み間違い。定額給付金や消費税、郵政民営化問題などでの発言のぶれ。こうした失態がマスメディアで報道され続け、支持率は急降下する。「部数」百数十万のメルマガでは、有力紙や主要テレビがこぞって報じた「負のイメージ」を挽回することはできなかったとも言える。

発信の総合力

さらに言えば、感想を寄せなかったメルマガ読者の中には、麻生氏への不信が広がっていたのではないか。ベレルソンが言う「パーソナルな性質」は説得に効果を発揮する一方で、激しい反発を呼ぶ要因となる可能性がある。指導者の言動が信頼できないと感じたとき、「パーソナルな関係」を感じていた人々の「裏切られた」という怒りはより大きくなるからだ。いわば両刃の剣である。06年の米国中間選挙でブッシュ政権与党の共和党が大敗北したことは、大量破壊兵器問題をはじめイラク関係で政権の「不正直さ」が次々と明るみに出たことが大きな要因だった。

麻生氏の場合、発言のぶれが信頼感を大きく下げたと考えられる。郵政民営化問題で、「賛成ではなかったが、内閣の一員だから最終的に賛成した」（2月5日）と言いながら、「（総務相に）指名された時は反対。いろいろ勉強させてもらい、民営化した方がいいと最終的に思った」（2月9日）と修正[26]した09年2月の支持率は14%と最低に落ち込んでいる。中川昭一財務・金融相（当時）がローマで二日酔いのような様子で記者会見し、激しい批判を浴びて辞任したのもこの月。その際、麻生氏が盟友と言われた中川氏の処分にためらいを見せた[27]ことも国民の信頼感をそいだと見られる。

首相としての姿勢、判断が信頼感をそいだという点では安倍氏にも共通する部分がある。安倍内閣メルマガはその饒舌さの一方で、国民的な関心事についての沈黙が目立った。閣僚の事務所経費の架空支出疑惑や不適切な発言が続いた際も、沈黙かごくあっさりと触れる程度。自分が任命した党役員・閣僚の不祥事について発言を避けたことは、安倍首相の率直さについて疑念を抱かせ、その主張に疑念を抱かせることにつながった部分があるのではないか。

ウォルター・リップマンは、「ほどよく安定した時代では、世論の象徴となるものですら照合、比較、論議の対象となるのをまぬがれない」[28]と指摘している。彼が分析した1920年代と比べ、人々がメディアから受け取る情報は、はるかに巨大で多彩多様なものになっている。インターネットで「誰もが情報発信者」となる時代でもある。指導者の言動は当時にまして厳しい「照合、比較、論議」の対象となっている。小泉氏に続いた3人の首相は、その厳しさへの認識が甘かったようだ。

メッセージのインパクトは顔の表情が最大（55%）で、次が声の調子＝音声表現（38%）、言葉は最後（7%）としたのはアルバート・メラビアン[29]だが、「表情だけ」、「声の調子や話し方」だけでよいわけはない。メラビアンが示す数字も、笑いながら辛辣なことを言うなど、それぞれの情報が相反する場合にどれが優先されるかということを示す指標なのだ。すなわち、総合的なメッセージ発信力がなければ強力なイメージづくりにはつながらないのである。メルマガもまた、ほかの情報発信と組み合わさってこそ力を発揮すると言える。

民主党政権もメルマガ発行は引き継いだ。『鳩山内閣メールマガジン』は自民党時代とほとんど同じ形式で、巻頭言は「鳩山由紀夫の『ゆう＆あい』」である。鳩山政権とそのメルマガに注目し続けたい。

注

1）1993年8月の細川護熙政権登場により政権を奪われた自民党は、政権奪回のため1994年6月、社会党の村山富市を首相とする自民・社会・さきがけの3党連立で政権を奪回し、96年の橋本龍太郎首相以降、自民党から首相を出し続けていた。

2）2005年9月の総選挙で自民党は296議席を獲得、公明党の31議席を合わせて定数の3分の2以上を確保した。民主党は113議席。09年8月総選挙では民主党309議席に対し自民党は119議席。公明党は21議席。

3）福田内閣メールマガジン、2008年9月4日発行第46号

4）朝日新聞、2006年9月20日付朝刊オピニオン面

5）らい予防法の強制隔離政策で人権を侵害されたとして、元ハンセン病患者らが起こした国家賠償請求訴訟の判決言い渡しが2001年5月11日熊本地裁であり、杉山正士裁判長は国のハンセン病政策の違法性を認め、総額18億2,380万円の支払いを国に命じた。

6）朝日新聞、2001年5月24日付朝刊3面「時々刻々」

7）朝日新聞、2005年2月1日付朝刊1面

8）中川昭一氏はローマでの財務大臣・中央銀行総裁会議終了後の記者会見でもうろうとした様子で記者会見し、「二日酔いで会見に臨んだのではないか」と批判を浴び辞任した。

9）朝日新聞、2008年4月10日付朝刊4面

10）総務省によると、光回線などDSL（高速デジタル加入者線）の加入者は年01年1月には約1万6,000人だったが、11月に約120万人となり、100万の大台を超えた。

11）内閣広報室および朝日新聞2009年9月3日付夕刊2面による。

12）http://www.whitehouse.gov
＝2009年10月19日アクセス

13）http://www.number10.gov.uk/
＝2009年10月19日アクセス

14）正式な会見ではなく、首相や大臣らの通りがかり

を記者たちが取り囲むような形で行う取材。

15）第32代米国大統領フランクリン・D・ルーズベルトが30回にわたって行ったホワイトハウスからのラジオ放送。5,000万人が聴いたと言われる。

16）「小泉総理　ラジオで語る」。03年1月から毎月1回10分間、全国34の民放ラジオで放送。39回続いた。

17）飯島勲『小泉官邸秘録』日本経済新聞社、2006年　p35

18）アドルフ・ヒトラー『わが闘争（上）』平野一郎、将積茂訳、角川文庫、改版10版、2006年、p236～p237

19）安倍氏は、自分の側近や友人を多く起用して内閣を組織、こう呼ばれた。赤城氏や世耕氏も「お友達」といわれていた。

20）朝日新聞、2008年9月2日付朝刊

21）福田氏自身が04年4月、官房長官在任期間が歴代最長になった際、「秘密主義長官？　それから何ですか。影の外相、影の防衛庁長官。いろいろ名前はありますが、まあ、しょせん影ですから」と語っている（2007年9月24日付毎日新聞朝刊）。

22）2008年3月7日のasahi.comニュースによると、増田好平・防衛事務次官は同月6日の会見で、事務次官、報道官のほか、統合幕僚長と陸海空の各幕僚長の計7人が定例会見をしていることについて、「ほかの役所と比較すると7人は多い」と発言。当時の石破茂・防衛相も同じ日の民放番組で、「窓口を極力絞っていくことは考えていかないといけない」と語っている。

23）公開する動画に、情報を追加してアップロードできるアカウント。「YouTube」コミュニティを楽しませ、積極的に情報を提供する人々が持つとされる。

24）2006年10月、町村信孝衆議院議員が森（喜朗）派を継承したが、実質的オーナーはなお森氏だと言われた。

25）W・シュラム編『マス・コミュニケーション　マス・メディアの総合的研究』1977年、学習院大学社会学研究室訳、東京創元社　p301

26）朝日新聞、2009年02月18日 朝刊2面

27）麻生氏は当初、中川氏の「続投」を指示したが、結局辞任を受け入れた。2009年2月18日付の朝日新聞2面「時時刻刻」は、＜首相の続投指示から一転、約18時間後の辞任表明。さらに約6時間後の即日辞任――。盟友の処分を決めあぐねた麻生首相を尻目に、中川財務・金融相に引導を渡したのは自民党幹部だった。＞と伝えた。

28）W・リップマン『世論』掛川トミ子訳、岩波文庫、1987年、（上）p24

29）Mehrabian, Albert. 1981. Silent Messages: Implicit Communication of Emotions and Attitudes, Wadsworth Publishing Company, Inc, =A・マレービアン、西田司ら訳、『非言語コミュニケーション』聖文社、1986年　p.96～p.97